

# 日韓比較民俗学の試み

—清明と寒食をめぐる—

竹田 旦

## (1) 問題提起—年中行事・農耕儀礼・祖先祭祀—

年々歳々、特定の期日に一定の行事が開催されることから「年中行事」の名称が生まれた。学術的には日本では「歳時習俗」、韓国では「歳時風俗」と称することが多い。この年中行事の成立については、東アジアでは中国文化の影響がきわめて濃い。第一に期日を定める「暦」自体が中国で発達したものであり、それを日韓両国ともに学習してきたし、個々の行事も同様に中国から受容してきた。行事を指す「節」の語も中国からの伝来で、日本の「節句（節供）」、韓国の「名節」という用法によく表れている。

さて、年中行事の起源を尋ねると、春には作物の豊かならんことを祈り、秋にはその稔りに感謝する「農耕儀礼」と密接な関連を保ち、併せて祖先に祈願と感謝の祭りを捧げる「祖先祭祀」とも通じ合っている。すなわち、年中行事・農耕儀礼・祖先祭祀の3習俗は相互に補完し合いながら発現するものなのである。しかし、個々の行事を取り上げてみると、それぞれの補完ぶりを摘出することはなかなか容易ではない。これをまず秋の収穫感謝祭に例を取って検討してみよう。

## (2) 秋の収穫感謝祭—「秋夕」と「盆」—

韓国では、陰暦8月15日の「秋夕」は、正月元旦のソル（설、「戒慎」の意から発したと言われる）と並ぶ2大名節である。秋夕を期して全国各地から故郷目指して一斉に帰郷する風俗は現代でも衰えておらず、外観的には、日本の「正月」と「盆」、中国の「春節」（陰暦の元旦）などと共通している。その秋夕については、離散していた家族一同が、久しぶりに集まって団欒を楽しむために帰郷するというよりは、明らかに家族の一員として祖先の祭りに加わるためという状況がうかがわれる。一家を挙げて墓参し、墓前に打ち揃い、祖先と子孫が相会して、飲食を共にするウムボク（「飲福」、「福」とは「寿福」と「財福」を指す）の風景が展開される。しかし、その祖先祭祀が、同時に収穫感謝の祭りを意味するかとなると、必ずしも明白ではない。

これは日本の盆にも通ずることである。陰暦7月15日の盆に祖先祭祀を行うという点では、韓国の秋夕と一致している。しかし、盆が同時に収穫感謝の農耕儀礼かという点、秋夕と同じく明白ではない。盆も秋夕も、秋の稲の収穫には1か月ほど早過ぎるからで、あるいは陸田、つまり畑作の麦類や雑穀等の収穫祭ではなかろうかと問う者さえ現われている。そこで、この点について、もう少し詳細に検討して見たい。

① 稲作社会…まず、日韓両国はともに水田における稲作を主とする社会であり、陰暦8月15日の秋夕と陰暦7月15日の盆との間にちょうど1か月のずれを示すのは、両国における耕作風土の差、稲作栽培の進行ぶりの差と把握しておきたい。その点、中国（漢族）文明の発祥の地、中国北部（華北）の黄河流域では、元来水田稲作が行われず、陸田におけるアワ（粟）・キビ（黍）・タカキビ（高黍）等の雑穀、後に麦類の栽培を主とし、陰暦7～8月に収穫を祝う年中行事・農耕儀礼・祖先祭祀の儀礼は見当たらなかった。したがって、陰暦8月15日の行事について、中国の「仲秋節」、韓国の「秋夕」、日本の「十五夜」を単純に比較して見ても、農耕儀礼の検証という点に限っては、あまり意味はないと思われる。

② 第一段の収穫祭…問題は、秋夕と盆の行事に関して、農耕儀礼としての収穫感謝祭を意味する要素が含まれているか否かという点である。もちろん秋夕・盆の当日には、家庭の行事としても稲の収穫を感謝するような内容は見当たらない。ところが実は、それぞれの前後に、秋夕や盆に迎える祖先を意識して感謝の祭りを挙げる習俗が両国に共通して認められるのである。これは稲作の感謝祭が、前後2段、つまり稲の完熟の前後に2回に分けて実施されるのが一般であり、その第1段の収穫祭として「穂掛け」の祭りが、秋夕や盆の期日に近接して催される点に注目したいのである。なお、第2段の収穫祭は、日本では稲刈りの終了を待って行われるのが古風で、一般に「刈り上げ」と呼ばれ、陰暦9～10月の間にずれ込むのが通例で、以前は刈った稲を田んぼに穂の付いたままニオ（稲積み）に積み上げて置き、その後必要に応じて少しずつ家に運び入れ、脱穀（稲扱き）・精米（米搗き）を行うふうであった。

前に戻って、盆と収穫祭との関連については、例えば鹿児島県種子島では、「盆米<sup>ぼんごめ</sup>」と称して盆に迎える祖先に新米を供える習俗が伝承されてきた〔民俗学研究所 1951 1442〕。この島の稲作は年間2回作、つまり1年に2度田植えを行い、2度稲刈りをするふうで、その第1期作が陰暦6月下旬から7月上旬に収穫され、7月15日の盆に十分間に合うのであった。ただし、種子島は気候のきわめて温暖な南島に位置し、稲作に恵まれた特別な地域性を保持していたと見られ、本土の他地域ではどんな早稲種・早場米でも、これに匹敵する早熟さは見当たらない。因みに、さらに南方の沖縄諸島では、稲作をめぐる農業暦が本土とは大きく異なり、まず年間2回作の第1期作が主作となり、陰暦10月に「種取り」と称して苗代に稲の籾種を播く祭りを催し、翌年5月に第1段の収穫祭に当たる初穂祭りとして「五月ウマチー」を行い、そして6

月に至って第2段の収穫祭として「六月ウマチー」を挙げ、新米を神々や祖先たちに供えて盛大に祝い祭る習わしであった〔真栄田・三隅・源 1972〕。

さて、日本の本土各地では、ホカケと称して、稲の初穂、すなわち完熟直前の稲穂を何本か、根元から刈り取って来て家内の神仏や竈・蔵などに掛け供える「穂掛け」「掛け穂」の行事は広汎に普及している。その期日は一定しないが、陰暦の「八朔」、すなわち8月1日を過ぎてからが多い。そして、未熟な稲穂を脱穀して釜に入れ、蒸し焼きにした「焼き米」を仏前に供え、また大人・子供も賞味する所がある〔民俗学研究所 1951 1413〕。一見して、これらが盆の行事と直結するとは思われないけれども、新米を一刻も早く祖先に供えたいとの願望は看取されよう。その情況は、沖縄諸島の穂掛け祭り、つまり「五月ウマチー」ではっきり表れて来る。たとえば、八重山諸島西表島の祖納<sup>いりおもて</sup>という集落では、初穂祭りには、家ごとに家の火の神・座の神・祖先に稲穂3本と初穂米と新米とを合わせて炊いた飯を供えるふうであった〔竹田 1995 134〕。

この「穂掛け」に当たる行事が、韓国の南部地方にも普及している〔竹田 1995 118～132〕。たとえば、全羅南道の北東部、智異山麓に位置する求禮郡山洞面位安里下位という村で行われるオルベシムリ（올베심리）の行事も初穂の祭りであった。

ここでは、稲がよく実る直前、日柄を選んで田んぼに赴き、なるべくよく熟した穂を数本、根元から刈り取って、2～3か所を縛り、アンパン（内房、主婦の部屋とされる）で祀るチョサンタンジ、つまり「祖先壺」を載せた棚に1年間掛けて置いたとのことである。また、刈り取って来た稲穂から一握りの籾を扱いて釜に入れ、火を焚いて蒸し焼きにしてから臼で搗いてチンサル（찜쌀）を作る。これは日本の「焼き米」に相当するものであろう。当日夕方、チンサルに古米を混ぜた飯を炊き、祖先に供え、香を焚いて収穫を感謝する。祭りが終われば、家族一同が会して「飲福」を催し、村内の親族はもちろん知人たちをも招いて会食するのであった。

これを要するに、オルベシムリとは、(1)早熟の初穂を刈り取って来て、家の神に掛け供える「穂掛け」、(2)その初穂の籾を釜で蒸し焼きにして精米する「焼き米作り」、(3)焼き米と古米を混ぜて炊いた飯を祖先に供え祭る「祖先への新穀感謝祭」の3段の行事から構成されていたと言えよう。そして、この祭りが時期的には中秋の大名節である秋夕に相前後して行われていたのは、やはり新米を逸早く祖先に捧げようとする意識が込められていたからと推測されるのである。

これと同様な穂掛けの行事は、全羅南北両道に広く伝承されており、呼称的にもオルゲシムリ（올개심리）・オルゲシムニ（올개심니）・オルギシムリ（올기심리）など似通っている。いずれもオルビョ（올벼、初穂）を祖霊にチョンシン（친신、薦新、新穀を祖先に供えること）することから出た語と考えられる。この行事は道境を越えて慶尚南北両道方面にも及んでいる。

ただしオルビヨ系の呼称は聞かれず、慶尚北道の安東市地方に伝えられるプッパシム(웃바심)のプツという語が、初穂を意味するようである。このように、韓国でも穂掛けの行事、すなわち第1段の収穫祭が、大名節の秋夕を目指すものであったと見られる。

以上を要するに、日韓両国において、いずれも第1段の収穫祭には、日本では「盆」、韓国では「秋夕」に迎える祖先に新穀を捧げたいという「薦新」の意識が含まれており、構造としては「年中行事」「農耕儀礼」「祖先祭祀」の3段が補完し合っていたものと理解されるのである。

### (3) 春の豊作祈願祭—「清明」と「寒食」—

古代中国では、春の半ば、陰暦の3月早々にも、農耕を開始するとともに祖先の祭りを挙げる習わしであった。これが年中行事に固定したのが「清明」と「寒食」である〔中村 1988 79～127〕。

① 中国・漢族の「清明節」…「清明」とは、中国の漢代に太陽の運行を観測して定めた「二十四節気」の1節気で、冬至より起算して105日目、陽暦の4月4日か5日、陰暦に直すとおおそ3月の初めに訪れた。これが中国の「清明節」「三月節」の起りである。この頃、華北の気候は陽春となり、木々は芽生え、春の農耕が開始される時期であった。また、華中の稲作地帯では、稲の播種を始める目安とされる日であった〔直江 1967 90～91 120～121〕。

「清明節」を迎えると、人々は酒食を携えて野山に出て遊び、また樹木を植える好機としたので、この日を別に「踏青節」「植樹節」とも称した。こうした伝統は現代中国にも引き継がれ、この日を期して、若者や大人たちは野外へピクニックに出たり、子供たちは屋外で凧揚げ・ブランコ遊びなどに興じたりしている〔周 2003 42～43〕。

「清明節」で注目されるのが、この日に催される祖先の祭りである。この節を別に「掃墓節」「鬼節」などとも称し、古くから墓掃除・墓参りに家族・親族が打ち揃って加わる習わしであった。いったいに中国・漢族の墓は土砂を盛り上げただけのものが通例で、雨風に弱くて崩れやすく、毎年墓参りの前に修復する要があり、それが清明節の最初の行事と考えられていた。現代でも、遠くにいる者たちを含めて一斉に帰郷し、墓掃除・墓参りに参加する習俗は保たれている。その状況は、まさに日本の「盆」、韓国の「秋夕」と一致するものである。異なるのは、日韓両国では、秋の収穫祭を期したのが、中国では春の農耕開始に当たってと、季節を早めて春に求めた点である。

また、小中学校では、清明の日に際して、生徒たちに戦没記念碑や愛国烈士墓園の大規模な集団清掃奉仕を行わせる例があるという〔周 2003 42～43〕。掃墓節の習俗に乗じて、愛国主義・革命精神の涵養を図ったものと見られる。

② 中国・朝鮮族の「清明」…中国東北部、吉林・遼寧・黒龍江の3省には、朝鮮族の集団居住地が各地に散在している。彼らが現地に住み始めたのは、19世紀の中葉以降に北朝鮮から経済的・政治的な理由によって越境・移住したという例が多く、中には1930年代に日本政府による集団移民政策に応じた例もあった。そして、今では行政的に朝鮮族による自治州・自治県・自治村等をなしている所もある。

このような朝鮮族の民俗文化について、韓国・中国の研究者と共同して、筆者は1993年から数年間にわたって現地調査を試みたことがある〔竹田 2000 219～234〕。彼らには祖先崇拜の念がきわめて篤く、例外なく祖先祭祀の行事が歳時風俗に随伴して認められた。彼らはこれを「名節祭祀」「名節茶礼」などと呼んでいた。中国では1966年より約10年間、「文化大革命」が全国的に吹き荒び、これによって墓地を撤去し、墓参を廃止した事例も現れたが、その後かなり復活して現在に至っている。

朝鮮族の間では、歳時風俗としては「秋夕」の祖先祭祀が盛大で、必ず前日までにポルチョ（벌초、伐草）を済ませ、当日家族が打ち揃い、供物を上げて「省墓」（墓参り）をするふうである。また、清明に墓直し・墓参りを行うのも朝鮮族のほとんど全域に普及していた。彼らも墓に芝を張ることはなく、土砂を盛り上げるだけで、年に一度は墓直しをしなければならず、それを清明に際して実施するふうであった。かつては元旦・上元（陰暦1月15日）・寒食・端午・百中（陰暦7月15日）などにも墓参りをする例も伝えられて来た。ある村では、寒食には朝飯、端午には昼飯、秋夕には夕食をそれぞれ供え、「寒食祭祀」「端午祭祀」「秋夕祭祀」と呼び分けたとのことである。ただし、寒食を取り上げる村はきわめて珍しく、確認したのは僅か1か村に過ぎなかった。現在、歳時風俗としての祖先祭祀が厳守されているのは、秋夕と清明の2回だけで、他の大部分は廃絶されたようである。

朝鮮族の清明祭祀は、いわば周辺の漢族からの影響を受けて、その風俗を習得したものであり、これに対して秋夕祭祀は彼らの故郷から持ち込んだ朝鮮族に伝統的なものと考えられる。中国の少数民族の中には、他にも漢族から清明節を受容した例があり、華南の白族・苗族・納西族や華北の蒙古族等の間でも举行されている〔鄭・張 1987 235〕。

③ 沖縄の「清明祭」…沖縄県でも、沖縄本島の中部以南の各地で「清明祭」が盛んに行われている〔平敷 1995 93～97 上江洲 2008 19～22〕。当地では清明をシーミーと中国式に呼んでいる。清明の当日、あるいは日柄を選んで、ムンチュウ（門中）の一同が、それぞれの一族墓（門中墓）に供物を上げ、参拝を終えれば、墓前に敷いたゴザ（莫蔭）の上や張ったテントの中で、供物を開いて会食の宴を催すふうである。沖縄の墓は「亀甲」「破風」型の堅牢・壮大なものが多く、毎年墓直しを行う必要はない。

沖縄の清明祭は、18世紀に中国漢族の習俗を受容したものである。沖縄へは14世紀末

に中国南部の福建省方面から招聘された「三十六姓」と呼ばれる者たちが、那覇の一角、港に近い泊<sup>とまり</sup>村に集団居留地を形成していた。彼らの中には学識経験者が混じり、早くから琉球王国の政治・外交の顧問、航海・造船の指南等に当たっていたのである。

当初、彼らの生活様式は、故郷の漢族風を維持していたのに、次第に琉球化し、同時に周辺の琉球人に対して影響を及ぼし、漢族化を促して行ったようである。琉球王家でも、尚穆王17年(1768年)、初めて清明祭を催して王陵に参拝したと史書『球陽』に記録されている。こうして、沖縄における清明祭は、当初中国人だけ、次いで琉球の高級官僚層に受容され、漸次一般庶民層にまで波及して行ったものようである。しかし、本島北部や周辺の離島、あるいは先島の宮古・八重山方面には、まだほとんど伝播されていない。

このように、沖縄本島の清明祭には、中国漢族と同様に、年中行事と祖先祭祀との結合が認められる。しかし、それに農耕儀礼を追加することは無理のようである。当地の陽暦4月初旬と言えば、稲作では年間2回作の第1期作が漸く出穂を迎える頃で、収穫にはまだ程遠く、何らかの儀礼を試みるような時期ではなかったからである。やはり18世紀以降、漢族文化の受容に過ぎないとして置きたい。

現在、清明祭の行われていない本島北部や宮古・八重山地方においては、これに代わる行事として陰暦正月16日の「ジュウルクニチー」が指摘される〔上江洲 2008 20〕。この日は、「グショウ(後生)の正月」とも呼ばれ、墓掃除・墓参りが行われるのである。元来、正月は吉事で15日までつづき、16日になって初めて凶事としての墓参りが許されたと言われる。

沖縄本島の陰暦1月は、稲作の暦では5月の「穂掛け」、6月の「大祭り」の遙か以前、まだ田植えの頃で、本土の3月頃に相当する。したがって、沖縄で1月に稲の豊年を祈願して祭りを催したとしても決して不自然ではない。

なお、日本本土では清明祭の習俗は認められない。本土では「清明」の語さえ、一般には用いられない。陰暦3月の祖先祭祀と言えば、春分の日「彼岸」を過ぎて間もなくである。しかし、これは「彼岸会」に発した仏教行事であり、墓直し・墓参りの風俗は広く認められるけれども、秋の「彼岸」とともにまだ民俗行事になりきってはいないと言える。日本本土では、横浜中華街など日本に居住する各地の「華僑」たちの間に、墓参を中心とする「清明祭」が盛行している。しかし、これらは本題からずれるので、ここではこれ以上言及しないことにする。

#### (4) 韓国の「寒食」

春の農耕開始を祝い、祖先の祭りを挙げる日としては、韓国では清明よりはむしろ寒食が重視された。そして、寒食は元旦・端午・秋夕と並んで「四大名節」の一つに数えられ〔張 1984〕、

この日を期して「節祀」「茶禮」と呼ばれる祖先祭祀が催されたのである。行事の内容としては、各地とも墓直し・墓参りを中心とする「茶禮」を挙げる点で一致している〔竹田・任 1989 744〕。

韓国の墓は、一般に土盛りした上に芝を張るので、大きく崩れることは稀だが、雑草が生えやすく、「改莎草」と称して補修を加え、改めて新たな芝を張り直すふうである。その後、供物を上げ、墓参りをして祖先を祀るのである。また、この日を期して移葬・改葬を行うふうも広い。

寒食の日取りとしては、冬至の後 105 日目、あるいはその翌日とされ、前述清明節の期日にきわめて近く、1 日前か同日という状況であった。したがって、寒食と清明の日取りや行事の内容をめぐって、しばしば混同されがちであったと言われる。

一方、この日に火を用いず、飯を炊かずに冷や飯で過ごすとも伝えられている。これは「寒食」の名称に発した現象で、これをめぐって、中国古代の春秋時代、晋の忠臣「介子推」の焼死を弔うという伝説は、日韓両国においてもよく知られている。とりわけ日本では、宮城谷昌光の小説『重耳』(1993 年、講談社)、『介子推』(1995 年、講談社)等によって一層親しみを深めている。

そこで寒食の起源をめぐる「重耳(後の文公)」「介子推」の伝説について、その要点を列挙しておこう。(1)前 7 世紀、春秋時代の 1 国、晋の献公の太子、重耳は王室の内紛に巻き込まれ、都を離れて流浪の旅に就いた。(2)従臣の 1 人、介子推は 19 年間の亡命生活に終始よく仕え、押し寄せる刺客を退けたり、時に自らの腿肉を割いて主君に食べさせたりした。(3)長年の艱難辛苦の末、やがて一行は都に帰還し、重耳は王位に就いて「文公」と称されるようになった。(4)論功行賞に漏れた介子推は、母を奉じて故郷の「綿山」の山中に隠棲し、主君からの度重なる恩賞の沙汰にも応じず、下山しなかった。(5)文公は、綿山に火を放てば下りて来るに違いないと思って、部下に火を付けさせたが、介子推は脱出せず、木の洞の中で母を抱いたまま焼死してしまった。(6)介子推の死を憐れんだ文公は、綿山を彼の名に因んで「介山」と改称し、山中に廟を建てて、彼を祀り、その命日から 3 日間、火を用いずに清明を迎えるように命じた。(7)この故事によって、後に清明を前にして火を用いず、冷や飯で過ごす「寒食」の風俗が起り、それが年中行事として固定した。

ところで、このような「介子推」伝説は、歴史上の事実ではなくて、彼の実在性さえ疑われるという。例えば、寒食の起源については、「改火」の習俗との関連など諸説が提出されている〔中村 1988 79～127〕。しかし、その伝説が多くの人々に史実と信じられ、寒食の行事が固く守られて来たことも確かなのである。2008 年 4 月には、彼の故郷とされる山西省介休市綿山で、「中国清明(寒食)文化祭」が初めて開催され、介子推追想式など数々の記念式典が挙行されたとのことである〔人民日報インターネット版 2008 年 4 月 9 日〕。

しかし、中国で寒食節が衰滅したのは、かなり以前のことであった。歴史を振り返れば、寒食は、後漢末から南北朝にかけて、冬至後 105 日の前後合わせて 3 日間とする風俗が定着した。したがって、清明は寒食明けの 107 日に移されたのである。ところが、明代に至って禁火の風俗が廃れ、寒食の名が実態に合わなくなり、代わって清明の名が好まれるようになった。これに伴って、寒食の時に行われた諸風俗が、清明の名に改められ、冬至後 105 日目の清明祭に統合されたと言われる〔中村 1988 79～127〕。

#### （５）おわりに―問題の再提起―

清明と寒食との混同は、中国自体においてさえ、歴史的に根深いものであった。すると、ここに新たな問題が起こって来る。

第 1 に、中国で寒食が衰滅して清明に変化し、統合されたというのに、なぜ韓国では古い時代の寒食に固執したのかという疑問である。韓国では、中国の事情を詳細に掌握しており、清明の名も用いられたのに、歳時風俗としては古い方の寒食に固執して来たのは、清明より寒食の方に特別な魅力を感じていたのではなからうか。とすると、その魅力とは何であったか。ともかく文化の伝播の過程で、一方を選択的に排除した事情については、あらゆる角度から分析を加えなければならない。この問題は、祖先祭祀という民族の基盤をなす精神文化であるだけに、その分析を粗略にすることは許されない。

第 2 に、日本では暦法を古代中国から直接に、あるいは朝鮮半島を経由して学習し、海外から歳時習俗の多くを受容したのに、なぜか清明も寒食も全く取り合わなかった。日本人も祖先崇拜の念が篤い点では韓国人と変わらないのに、初春の陰暦 3 月、農耕開始に当たっての祖先祭祀は発現しなかったのである。双方の間に農耕暦に若干のずれがあることを念頭に入れても、それだけでは説明にならない。その代わりとしての日本の「彼岸」は、仏教行事としての「彼岸会」の色彩を多分に留めており、これが伝承的な歳時習俗に及ぼした影響を多大に評価することはできない。

これを要するに、日韓両国における歳時習俗・農耕儀礼・祖先祭祀の各習俗は互いに補完し合っているのに、中国から個々の行事を受容するに際して、選択的排除という現象が認められた。その情況は、秋の収穫感謝祭の「秋夕」や「盆」よりも、春の農耕開始を告げる「清明」や「寒食」の習俗に顕著に表れて来る。しかし、このような選択的排除の現象に対する比較民俗学的な解明の試みは、残念ながら、未だ緒に就いたばかりで、ほとんど全てを今後の努力に委ねられているのである。

以上の問題提起の参考のために、末尾に、付表として、中国・韓国・日本 3 か国における歳

時習俗と祖先祭祀の比較対照表を掲げておこう。

付表 歳時習俗と祖先祭祀の比較対照表

		陰暦 8 月 15 日	陰暦 7 月 15 日	陽暦 4 月 4 日頃
中国	漢族	仲秋節	×	清明節 (祖先祭祀)
	朝鮮族	秋夕 (祖先祭祀)	×	清明 (祖先祭祀)
韓国		秋夕 (祖先祭祀)	百中	寒食 (祖先祭祀)
日本	本土	十五夜	盆 (祖先祭祀)	×
	沖縄	十五夜	盆 (祖先祭祀)	清明祭 (祖先祭祀)

#### 〈参考文献〉

- 上江洲均 2008 『沖縄の祭りと年中行事—沖縄民俗誌Ⅲ—』 榕樹書林
- 財団法人 民俗学研究所編 1951 『総合日本民俗語彙』 第4巻 平凡社
- 周国強著 笈武雄・加藤昌弘訳 2003 『中国年中行事・冠婚葬祭事典』 明日香出版社
- 竹田且 1995 『祖先崇拜の比較民俗学—日韓両国における祖先祭祀と社会—』 吉川弘文館
- 竹田且 2000 「朝鮮族の喪祭儀礼—朝鮮族民俗の漢族化—」『日韓祖先祭祀の比較研究』  
第一書房
- 竹田且・任東權訳 1989 『韓国の民俗大系—韓国民俗総合調査報告書—第3巻 慶尚南道篇』  
等各巻 国書刊行会
- 張籌根 1984 『韓國의 歳時風俗』 螢雪出版社
- 鄭傳寅・張健主編 1987 『中國民俗辭典』 商務印書館香港分館・湖北辭書出版社
- 直江廣治 1967 『中国の民俗学』 岩崎美術社
- 中村喬 1988 『中国の年中行事』 平凡社
- 平敷令治 1995 『沖縄の祖先祭祀』 第一書房
- 真栄田義見・三隅治雄・源武雄編 1972 『沖縄文化史辞典』 東京堂出版

(竹田 且 たけだ・あきら 茨城大学・創価大学 名誉教授)